

特集

火舞

手筒

伝統の担い手たち

火舞

手筒

伝統の担い手たち

今から四百年ほど昔、三河地方で一つの花火が誕生しました。現代に受け継がれる手筒煙火です。

日本の花火の発生は三河にあるという説があるほど、三河の花火には古い歴史と長い伝統があります。その中でも手筒煙火は奉納する人の手によって最初から最後まで作られる特異な花火であり、最も原始的で豪快な中に、素朴な美しさを持っています。

今回の特集では、三河地方に四百年以上もの間受け継がれてきた手筒煙火について、伝統を守り伝える人々の思いを通して、今年で二十回を迎える豊川手筒まつりを紹介します。

豊川に受け継がれる

火の祭り

舞い上がる炎に歴史と伝統を
受け継ぐ人々のプライドを感じます

手筒煙火の起源

手筒煙火の起源は戦国時代にさかのぼります。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英傑が三河の人間であることはよく知られていますが、この三英傑が活躍する時代に、火薬を使った武器が登場しました。この火薬を使った武器、火縄銃の登場により戦乱の世が終わりへと向かったことは事実であり、三英傑と火薬との関係は切り離すことができません。

一五四三年に種子島に鉄砲が伝えられ、その六年後には十六歳の信長が五百丁の火縄銃を調達し、鉄砲組を組織したと言われています。更にこの信長から秀吉の時代に南蛮人によって花火が伝えられています。

いち早く火薬というものに目をつけていた信長は、一五八一年には安土城外で祭りを催し、「炬火」と呼ばれる手筒の小さなものを町民に持たせ、火の粉が舞う中で、武將

の子弟たちに勇壮さを競わせたという記録も残っています。この炬火には焰硝と呼ばれる火薬が詰めてあり、点火すると火花が飛び出し、辺り一面煙に包まれたそうです。

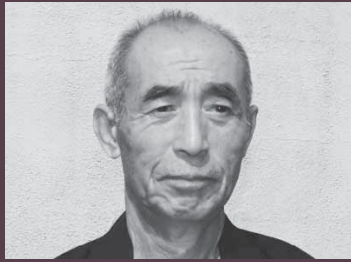
これが、今に伝えられる手筒煙火の起源と言っても差し支えないでしょう。

三河で発達した煙火

やがて、全国統一の偉業を成し遂げた駿府(静岡県)の徳川家康が抱える鉄砲組は、そのほとんどが三河の若者たちで固められていたと伝えられています。

江戸幕府が開かれ天下泰平の世の中になると、鉄砲組の若者たちの一部は駿府に残りましたが、その多くは郷里である三河へと帰って行きました。そして、家康はこの三河の鉄砲組にだけは、火薬の製造と所持を許したそうです。

こうして彼らは体得した火薬を扱う技術を郷里の子弟に伝授しました。このようにし



花火師 久世栄八郎さん

20年前の第1回豊川手筒まつり当初から花火師としてかかわる。手筒煙火を愛し、その普及に務めている。

「事故がないこと。それが一番。」

手筒は、火薬を込める作業も奉納者自身が行う。そのため、事前に我々花火師のもとで講習を受け、火薬を扱う資格を取得してもらった。資格を持っているとはいえ、花火師でもない者が花火工場内で火薬を扱うことなど、ほかの地域では考えられないこと。しかし、この地方ではこれが当たり前。そうやってはるか昔から受け継がれてきた。火薬の込め方は口で言っただけで教えられるものでもない。その技術はベテランの年長者の作業を見て覚える。最初のうちは肝心な部分をベテ

ランに頼み経験を積み、自信がついたらベテランの指導のもと作り上げる。やはり最後には経験と勘を頼って作業を進める。今では手筒は日本全国と比べていいほど広まっている。しかし、二十年前はまだまだ口伝秘伝による継承で行われていた。ほんの少し前のことだ。神社ごとに行われており広まることもない。きちんとしてマニュアルがないため、事故も起こる。これではいけない、と豊川市内の手筒関係者が集まり、一つの大きな祭りとして始めることになった。

こうして、豊川手筒まつりが始まった。奉納手筒煙火では、古いときたたりがあり女性は参加することが難しい。しかしお祭りならそうしたこともなく、だれでも参加が可能だ。豊川の夏を代表する祭りとして、今年で二十回を迎える。評判を聞き、四国や長野県から手筒の教えを請いに来る人もいる。そういう人には技術の全てを伝える。中途半端は事故につながるもんだ。安全第一。昔から受け継がれてきたことだ。



て三河武士の火薬を扱う技術は、民間に秘密のうちに伝えられ、またその技に秀でる者も現れ、さまざまな花火へと姿を変えていきました。やがて火薬の持つ危険性は、神を敬い畏れる人々の信仰心と結びつき、その表れとして祭礼用の手筒煙火などが献上されるようになりました。伝統の技を今に伝える

継がれてきています。豊川市内においても、古くからある町内にその技を見ることが出来ます。地元の青年団を中心として、それぞれ独特なスタイルを保ちつつ、歴史と伝統を今に伝えていきます。手筒煙火は、ひとつ間違えば命すら落としかねません。その一瞬に全神経を集中し、数十秒間に全身全霊を打ち込みます。舞い上がり降り注ぐ火の粉の中で不動の姿を保ち続ける姿に、四百年の歴史と伝統を受け継ぐ人々のプライドを感じます。

一瞬の輝きに 全てをかける。

「子どもものころから手筒を揚げる親父たちにあこがれていたんです。参加が許される十八歳になったときは、やっとな来た！と感無量でした。最初の感想？もう夢中で頭の中が真っ白だったですね。降り注ぐ火の粉の熱さも、手筒終了時の強烈な『ハネ』も覚えていません。覚えているのは、目の前を通り過ぎる無数の炎の輝きだけですね。」

楽しそうに語るのは、国府地区の渡辺史貴さん。

「手筒は樹齢三年以上の孟宗竹に約一・八から三・二キの火薬を詰め込み外側を荒縄などで強化した

もの。その準備作業は、竹の切り出しから火薬の詰め込みまで、自分の手筒は自分で作るのが基本です。最近はなかなかいい竹が手に入りにくくてたいへんです。経験の浅い若い者から竹を選ぶので、経験の長い年長者ほどいい竹が選べない。それでも、ベテランはピシッと作り上げてみせる。これがまたかっこいいんですよ。」

話す姿がどこか誇らしげに見えます。



国府地区
渡辺史貴さん

手筒の噴射口の温度は1000度以上、降り注ぐ火の粉に耐えて一人前、親父みたいにカッコよくなるには、後何年かかるのかな...



「竹林から大きな孟宗竹を切り取るのも一苦労ですが、それからが更にたいへんです。切り取った竹の油抜き、縄巻き、そして火薬詰めと作業が続きます。そして本番。点火からわずか数十秒。一瞬間違えば命にかかります。」

それでも手筒を揚げ続けるのはなぜなのか。

「正直、自分でもよくわからないんです。でも、手筒が揚げられる限り続けます。」

はつきりと語るその目は、手筒の一瞬の煌きを感じさせます。



豊川の 夏の風物詩

第20回 豊川手筒まつり

東三河手筒煙火の真髄を現代に伝え、保存することを目的に始められた祭り。豊川市内の各地に伝えられてきた門

豊川に息づく伝統文化を見に行こう

この思いを
後世に伝えたい。

「火薬の込め方は、一朝一夕では身に付かないですよ。はじめのうちには、ベテランの横について、手伝いながら覚えるんです。手作業ですから、技術は年長者から目下の者へと、身体で伝えられます。命にかかわる技術だけに教える方も教えられる方も真剣勝負です。」

手筒歴三十五年の渡辺修己さんは、厳しいまなざしを向けます。「音で火薬の仕込み具合を判断するんです。詰めた火薬を棒でたたいて、『コン、コン』と響く音がしないと、火薬が均等に詰まっていない証拠です。詰め方がゆる



かったり、竹にひびが入っていたりすると、空気を伝わって手筒の中に炎が一気に広がり、爆ぜてしまふ。慎重の上にも慎重さが要求される作業なんです。」

聞いている方も思わず緊張してしまいます。

「何年たつても、火薬は怖い。だから、自分が揚げるときよりも、若者が揚げるときが一番緊張します。」

語る姿に年長者の思いが込めら

れています。親から子へ、年長者から若者へ受け継がれてきた思いの深さを感じます。

「豊川の各所に受け継がれてきた手筒を、全て目の当たりにすることができ『豊川手筒まつり』は、やっぱり楽しいですよ。他の地域の人たちの話を聞くことができますし、技術も見ることができずから。おそらく、参加している皆が思っていることでしょうね。切磋琢磨の場ですよ。」

笑みを浮かべながら話す様は、手筒に対する思いの深さを改めて感じさせます。

手筒歴35年のベテラン
渡辺修己さん

親子三代で手筒を揚げるのが夢なんです。その日が来るまで続けたいですね。



外不出の神事、手筒煙火が一堂に会する貴重な機会です。

「豊川手筒まつり」は、昭和六十三年に始まり、六百五十本もの手筒煙火が豪快、壮大に打ち揚げられます。平成九年からは櫓の練り込みや片手手筒煙火の放揚など、通常の神社の祭礼では参加が難しい女性にも門戸を広げています。

くわしいことは、豊川商工会議所（86局4101番）または市商工観光課（89局2140番）へ、お問い合わせください。

期日 八月二十五日（土）雨天は二十六日（日）

時間 午後五時三十分から九時三十分まで

会場 陸上競技場